

あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250-23
04(7182)
0861

星野市長と五団体代表が面談

「我孫子に郷土資料館を」訴え

7月12日(火)五団体各代表が市長室に星野市長を訪ね、「我孫子市に郷土資料館(センター)の建設を」と訴えた。

これまでも五団体会議では市の「文化交流拠点施設」構想案の、ブリックコメントに応募し、意見書をもつて五団体が抱く「郷土資料館構想を訴えてきた。また各地区で郷土資料センターの必要性について講演会を実施したこともあり改めて市長に要望を伝えた。

これに対し、星野市長は30分間に亘り市の現状を説明された。「長年の懸案であったクリーンセンターや消防署の建設の目的が立ったので、次の課題として市民会館と小中学校の建て替えを考えている。市民会館(文化交流拠点施設)については皆さんの意見を幅広く聞いていますが、様々な意見があり、今までは意見を集約しきれいていませんでした。しかし漸くある程度の案が固まりつつあります。そこで浮上したのが老朽化した市役所機能と市民会館の合築です。その用地としては利便性から考えて駅前などが考えられます。我孫子駅だけでなく天王台駅も考えられます。市民会館の建設だけでは国からの補助が得られないので市役所機能を添えなければと考えています。」

従来に比べかなり具体的な話に進んでいるとの感触を得た。

(当日の五団体の出席者)：市史研究センター岡本和男会長、荒井茂男事務局長、東日出夫副会長、あびこガイドクラブ新井利雄会長、我孫子の景観を育てる会中塚和枝会長、ふるさと我孫子ガイドの会中込力三代表、我孫子の文化を守る会美崎大洋会長

超有名山岳ガイドが講演

我孫子市在住の倉岡裕之氏が放談くらぶで

8月21日、倉岡氏を招き講演会を実施した。当会の放談くらぶとしては異例であるが、大きな会場の市民プラザホールを用意し、開催した。

倉岡氏はエベレストを筆頭に、世界7大陸の最高峰を山岳ガイドとして登頂し、山岳業界では「世界のクオラカ」として知らない人はいない。極寒、強風、吹雪など、常に死と隣り合わせの極限の世界でチャレンジするクライマーをいかに安全に登頂させるかをサポートするのが仕事。冷静かつ的確な判断で数多の登頂をサポートしてきた。

この有名な倉岡氏が我孫子在住であったことを知る参加者も少なかったようだ。

講演は数多くの写真の映写とともに今までの輝かしい実績や危険な仕事の内容を淡々とした口調で語り聴衆の心をつかんだ。会場内には氏が開発した登山用品や登山ウェアなども展示しており、展示品の前で参加者からの質問にも自ら回答していた。

放談くらぶ講演会報告

「山岳ガイドという仕事」を聴いて

牧田 宏泰(会員)

8月21日(日)本日の「放談くらぶ」は標記の演題で、あびこ市民プラザホールで開催された。

講演者は、「倉岡 裕之(くらおかひろゆき)」氏。世界の最高峰ヒマラヤのエベレスト(標高8,848m)に9回登頂という日本人最多記録の経歴をお持ちの、著名な「山岳ガイド」である。しかも「倉岡さん」は我孫子市に住んでおられるというから更なる驚きだ。その倉岡さんをお迎えしての「放談くらぶ」、お話に期待は高まった。(写真1)

余談だが、最近の「山ブーム」は、テレビ番組の「低山

巡り」「国内100名山登山」「田中陽希：日本300名山ひとふで書き登山」などで頻繁に取り上げられ、それらが「ヤマガール」などの呼称の誕生にもなり、ひいては、NHKスペシャルで国内高山から海外の著名高山の「ドローン空撮」を駆使した素晴らしい映像紹介など、手軽に「山登り？」が体験できる時代になったのはありがたいことだ。一方で中高年者の気軽な登山ブームにより、遭難事故が後を絶たないのも問題視されているのは残念だ。

私個人は、50年も前に八ヶ岳連峰の「蓼科山(たてしなやま)：2,531m」や「富士山：3,776m」に上った記憶はあるが、あとは各地の山にケールカーやロープウェイを併用した観光登山ばかりで、「山登り」ではない。

本日の講演は、「登山のプロ中のプロ」を迎えての講演。長引くコロナ禍の最中、人数制限をしての開催であったが、「山ブーム」の影響もあつてか、約70名の聴講者を得てのスタートである。

さて、倉岡さんは、1961年東京生まれ、小学校4年生の時、我孫子市内の小中学校に転入、市内中学校を卒業、高校時代は毎日手賀沼で10kmタイムトライアルを行って体を鍛えられたようだ。現在61歳。

そもそも山とのお付き合いのきっかけは、小学校5年生の時に、書店で偶然に、ある本の表紙を飾る「ロッククライミング写真(剣岳)」に出会い、子供心に「山で生きていきたい」と心を動かされたこと。その出会いが今の原点だとは、「男のひらめき」だろうか。「中学時代も心は常に山に向かっていた気がする」と、ご自身は当会会誌7月発行188号「あびこの文化」の「あびこだより101号」にて紹介されている。

大学在学中に、クライミングを始め、社会人の山岳



クラブで活動。土、日に限られた短時日で一週間の登山コースを踏破するなどの過酷ともいえる活動を行った。このころ、自己流で行っていた自分の山登りについて、先輩から「安全」の重要性を説かれ「安全管理」により留意することになる。

講演は、「登山家」と「山岳ガイド」の相違点や、ご自身の想いなどに触れながら、主な活動内容の紹介からスタートした。

1 主な経歴・実績など

21歳の時に、初めて「ヒマラヤ」に行き、ヒマラヤという山を知る。

1984年(23歳)テレビ局企画で落差1,000m近い「エンジェル・フォール(南米ベネズエラ)」に挑戦。世界で初めて巨大な落差を誇る滝の登攀に成功。東京12CHで放映された。

翌年1985年には、登山家・冒険家として著名で、前年に冬季のマッキンリー単独登頂後、下山中に遭難し亡くなられた「植村直己さん」の追悼映画「植村直己物語」の制作のため、プロジェクトチームに参加、半年にも及ぶ映画製作に携わった。倉岡さんは、これらの活動で多くの人脈が得られ、今の仕事に繋がったと言う。

それは植村直己さんの「5大陸最高峰登頂」「アコンカグア登頂」や、「NHKスベシヤル」で「ミヤンマー最高峰登頂」、



そして先のエンジェル・フォール登攀」などで活躍された「登山家・カメラマン」などの人脈とのこと。この方達はカメラマンばかりか登山家としても超一流の技術、体力を備えており、自分より3倍は強いと倉岡さんは言う。

(写真2)(写真3)

その後、倉岡さんは、「ロッククライミング懸垂下降」中に事故による骨盤骨折の大きな負傷のため「登山家」を諦め、12年間クライミングからは遠ざかる。その間、知り合いの山岳雑誌編集長の方が設立した「山の旅行会社」社名不詳に就職。約20年間の仕事から世界中を回り、身に付けた旅行の「ノウハウ」も活かし「山岳ガイド」となる。

2003年登山家ラッセル・ブライスが率いる「ヒマラヤン・エクス・ペリエンス隊」にガイドとして参加。8,188m(チョ・オユー・チベット)に登頂(通算3回)。

2004年「エベレスト(北稜)」8,848mに初登頂。以来今まで9回登頂(日本人最多)。

2006年インドネシア・ニューギニア島の「カルステンツ・ピラミッド」5,030mに登頂(通算7回)。これによつてガイドとして7大陸最高峰(※登頂を達成(日本人11人目)。(※)「セブンサミッツ」と呼ばれる。現在、このインドネシア、オーストラリアの両地域を合わせ「オーストラレーシア」と呼び、大陸の一つに認識されているとのこと。続いて2007年にもガイドとして「エベレスト(北稜)」登頂し、以降2009, 2010, 20



エベレストは、中国側からとネパール側の登山ルートがあり、その様相は異なるとのこと。その他、登山歴は「マナスル」8,163m(チベット)「登頂4回、カメット」7,760m(インド)、「エルブルース」5,642m(ロシア)「10回、マッキンリー」6,190m(アメリカ)「5

11、2013の各年(南東稜)、2016、2017、2018年(北稜)とガイドとして「エベレスト」登頂(通算9回)に成功する。このうち2010年は、我孫子市市制40周年の記念フラッグ(倉岡さん自作)を掲げて登頂。(写真4)

(写真5)



回、「アコンカグア」6,961m(チリ、アルゼンチン)15回、「ギリマンジャロ」5,895m(タンザニア)3回などガイドとして登頂などがある。

(写真6)



TV出演には2013年「TBS・80歳の三浦雄一郎王ベレストに登頂できた秘密」や2014年などの日本テレビ「世界の果てまでイッテQ!」で「エベレスト」、「南極」ギアナ高地「黒部」、「立山」宝剣岳、2015年「NHKスペシャル」幻の山カボラジ」など。(写真7)

2 体験・

苦勞話・発見

などいろいろ

この、超人的

な仕事の裏

には、緊張感

とともに

様々な苦勞

やエピソード、

教訓も存在

する。スクリ

ーン映像を

用いての倉岡

さんの講演



が続く。

① 「安全第一」

自己流で始めた「ロッククライミング」で先輩から厳しく、まずは「安全第一」を叩き込まれたことに始まり、その後の「山岳ガイド」という仕事に一貫して生かされている。自分のみならず、チーム、お客のメンバー全員を守る。

② 「トレーニング」

自分自身の日常のトレーニングはさることながら、ガイドで案内する場合の高山登山には「低い山」から徐々に「より高い山」昇りを経験してもらいながら、徐々に環境に馴らすトレーニングが欠かせない。

③ 「判断力」「食欲の低下と装備対策など」

8,000m級の山では、気圧はグングン下がり、酸素量は地上の三分の一にも低下し、気温もマイナス30℃以下にもなる。「脳」の機能は、思考力がどんどん失われ、一つのことをこなすに大変になるそう。

衣類もツーピースからワンピースにし、軽量で着やすいものにする。「食欲」も全くなくなるので、持参内容の選択が大変だが、体力維持のためには極力美味しいものを補給する必要があるとのことだ。

沸点も下がり(プラス60℃ぐらいまで)調理が大変だ。アルコール飲料にはすぐに酔ってしまう。(写真8)(写



真9

④ 「環境への配慮」

人間の生理現象である下の始末は、「高山」「極寒の地」のキャンプや移動において、環境への配慮が欠かせない。その方法など苦勞話も紹介された。

⑤ 「地球温暖化」

高山の「氷河・雪渓」は、かなりのスピードをもって縮小。「氷河」がズタズタ。自然環境の変化が、登山の危険性を大きくしているとのこと。



と。「クレバス」にはかなり注意を払った。温暖化を痛感するとのこと。(写真10)

以上いろいろお話さ

れたが、実体験を踏ま

ないと、「危険との闘

い」など研ぎ澄まされ

た神経を持ち合わせ

ながらの「山岳ガイド

なので、登山同行者

(お客様)へのいろいろ

な配慮、同行者の満足

体感が得られる設定

など、大変な仕事なこ

と。この真の理解は、

我々には難しいと思



み、マイナスイオンの満喫など、「山岳ガイド」という仕事は、ご自身も常に新しい喜びと感激を体感する素晴らしい仕事」だと思ふ。倉岡さんは、今、「コロナ禍」でストップが余儀なくされている「仕事再開のタイミング」を、トレーニングをしながら探る毎日とのことだが、「最近の世界を取り巻く政情不安が『ヒマラヤ』などへの登山事情に大きく影響するようだと心配が隠せない姿は、日焼けし、引き締まったスリムなボディの「山男」を強く印象づける。(写真11 講演会記念写真)



（寄稿）

大正6年（西暦1917年）に注目

志賀・武者小路・柳・リーチ4人の「人生の思索」と「後世への最大遺物」

ふるさと我孫子ガイドの会 中込 力三

ふれあい塾セミナーで志賀直哉研究を行っていた時、大正6年がとても気になっていた。それは、彼等がこの年、毎日の様に会っていたことである。この年、志賀直哉は満34歳、武者小路実篤は満32歳、柳は満28歳そして、リーチは満30歳である。

彼等は未だ若く、未だ青春を満喫している年代である。そんな彼等が毎日、顔を合わせていた。

志賀は大正4年9月から、武者小路は大正5年12月から、柳は大正3年9月から、リーチは大正6年3月から寮を開いて柳家に週4日住んでいる。大正6年、4人が我孫子に住で重なっている。血気盛んな彼等は毎日何を語ったのであろうか。中心の話題は、「白樺」であろう事は推測出来る。お互いが描いた作品を評価する内で、4人の夫々の自己の人生を思索したのではない。

「或る男」(200)に武者小路は、次の様に描いている。

【我孫子生活はきまつていた。彼は朝飯前に彼の所謂朝飯前の仕事をすませて、朝飯を喰うと、来る人がないと柳から志賀の方へ出かけた。そして夜まで志賀の所へ行くこともよくあった。彼は出かけることがすきで、志賀はとめることが好きだから、志賀の所へゆくとおちついた。昼めしか、晩飯は、大概、柳か志賀の所で喰った。志賀や柳も時々来たが、彼が2度ゆけば1度来る位の交わりであつたろう。そして毎日逢っていた。】

武者小路は、志賀の妻康子が従妹関係でもあり過ぎ易かったのであらう。この様に描いているので、頻繁に会っていたことは、間違いないのであろう。

文中で「毎日逢っている」と描いているのが気になる。ふつうは「毎日会っている」ではないか。逢っているという表現は、友情を超えた信頼が加味されているのではないかと私は考えている。

頻繁に逢って彼等は何を話題にしていたのか。世間話も有ろうが、「白樺」の記述を中心に夫々が描いた作品の批評、他者の論評等を行い、従来より一層、絆

を深めたに違いない。

こうした絆を深める中で、大事なものは、彼等は、からの人生を如何にして生きていくのかの柱を確立したのではないか。又、その考え方を夫々が尊重し、励ましあつたと私は、推察する。

我孫子は、彼等の自立心を育んだ地ではないかと捉えている。

志賀直哉

4人について、一人ずつ探求する。先ず、志賀直哉である。志賀は、我孫子に移り住む前は、父との不仲、妻の体調不良もあり、大正3年9月から文筆活動は我孫子に来るまで、中断状態であつた。ところが、大正6年4月になると、「佐々木の場合」、「城の崎にて」を書き、7月に「好人物の夫婦」8月「赤西蠣太」、そして9月には「和解」を書き上げている。沈黙から復活への原動力は、何であつたのか。これは容易に推察できる。我孫子に来たことにより、武者小路や柳を含めた「白樺」同人の往来が活発になった事である。(康子の体調安定と子供の誕生も大きい)特に、武者小路とは、二人だけの回覧雑誌を作つて、それに「佐々木の場合」、「城の崎にて」を書いたことが活動の契機になったとされている。志賀直哉は、「和解」で次のように書いている。

【Mが暮れ近くから隣村に住むようになってから我孫子も賑やかになった。

5,6年前から多く他の地方で住んでいた自分は久しぶりでMと繁々往来するようになった。そして日が過ぎるに従つて自分の中にあつたMに対する旧い愛が又、何か新しいものを附加しながら目覚めていくのを感じた。此事は、愉快であつた。そして自分の心にいい影響を与えた。彼は実際相手の内にある良きものを引きだす不思議な力を持っていた。又、彼は、心と心の直接に触れ合う妙味を良く理解していた。】

志賀は、これ等の作品の発表により短編作家として第一流になり、小説家として自信を深めて歩むことになる。志賀のこの一歩先んじて、世間に評価されたことが他の3人に良い刺激を与えたと考える。

武者小路実篤

では、武者小路の大正6年はどうであつたのか。その前に、武者小路は志賀をどの様にみているのか。

【彼は他人の目でものは見ない。他人の頭で考えない。他人の心臓にあわして自分の心臓を動かさない。頑固だが、又すなほではある。いつも本当を見ようとしている。だから信用がおけ、他の人が感じられないものを感じるのだ。そしてそれを彼らしく表現する。ぴたりと感じたものびたりと表現するのであるから読むものは気持ちがいいし新鮮な気持ちができる。】「牟礼随筆」より（武者小路実篤全集15巻）

「白樺」の消長を文学史家は、三つに分けて、明治43年から大正2年までを一期・興隆期、大正3年から6年までを二期・最盛期、そして三期の衰退期が大正7年から同12年までと考えている。最盛期は、大正3年～6年としているが、大正6年がピークとなつている。彼等が毎日、顔を併せて作つていたのであるから頷ける。この「白樺」の成長と実篤文学を重ね合わせて見る人（※1）がいる。それによると。

一期がトルストイ離れで、自我を確立した時代。二期が造物主の意思を信じ自分の本能を是認した時代である。次の三期は、隣人の自我をも認めて、「されど仲よき」時代に向かつて発進する時期に当たつてゐるが、隣人圏の規模は拡大されて「人類」を意味していた、と分析している。

武者小路にとつて、大正6年は「新しき村」に出生する前年である。それまでは、自己を信じてゐることが出来なく、人生迷つてゐたけれど、この年になつてやっと、自分の本能を是認することが出来たのである。志賀と柳と議論する中で、主観を交えないで物事を冷静に観察して意味を明らかにする考えが確立したのではない。更に、白樺文学館の資料で指摘しているように、我孫子は「人間らしく生きる」「自己を生かす」という社会の実現を目指す「新しき村」への思いを熟成させた「思索」の地となつた。

只、ここで私は疑問を持つ。それは、武者小路にとつて我孫子は、居心地が良かったのかどうかである。居

心地が良いのであれば我孫子に移住して2年足らずで宮崎に行くことはない。そこで、当時の武者小路の心の内を覗く情報は無いかと探ると「自分の歩いた道」（読売新聞に連載（※2）に辿りついた。これは、武者小路が自ら書いたものであり、我孫子生活を次のように振り返つてゐる。

【それから我孫子の生活になるわけだが、僕もやつと文筆で生活できることになつたが、そして毎日志賀や柳と手賀沼を舟で往来した楽しい生活がはじまつたわけだが、自分がのん気に生活するにしたがつて、どうも僕はなにかおちつかないものを感じた。僕の文学の仕事は一日二、三時間で済む。後の時間がどうも自分には空虚な感じがした。これはトルストイによつてまかれた種がいつの間にか成長したのか、僕元来の性質にそういう傾向があるのかしらないが自分の生活が、どうも本当に思えなくなつたのだ。】と書き、そして、【その結果、33のとき、新しき村の生活を同志とはじめることになつたのだ。】とある。

武者小路は、志賀や柳と逢う中で葛藤してゐたのである。そして、宮崎入りを決断した。

武者小路の代表作の多くは宮崎に入つてからであることを考えると、人生の思索を我孫子でし、自分の空想している社会の実現は、だれでもやろうとおもえばできるはずだとの結論に達し宮崎に飛び立ち、村創りの実践に取り組んだことが武者小路を開花させたのではないかと考える。武者小路にとつて我孫子は、正に、「人間らしく生きる」「自己を生かす」という社会の実現を目指す、「新しき村」への想いを熟成させた「思索」の地であつた。

柳宗悦

柳が中等科2,3年頃、志賀が集めていた浮世絵を見に訪ねたのが最初で以来55、56年来の交わり。2人は喧嘩をしたことが無い。我孫子では、5、6年ほとんど毎日逢つてゐる。その後、親戚となり、共通の孫が3人いる。柳の次男（宗玄）と志賀の四女万亀子が結婚（昭和20年4月）

三人目は柳宗悦である。柳にとつて大正6年はどんな年であつたのか。

実は、この年2月18日に次男の宗玄が誕生している。宗玄は、「解説 手賀沼の畔の思索者」（※3）で自分の名前の「玄」は、【「宗教的『無』」の一文を草し終つたときに選ばれた。「玄」は老子の「玄之又玄」の「玄」であつたことは、この一文の中に老子の思想が強く投影していたことを示すものである。

玄とは周知のように老子冒頭の体動第一に出てくる重要な概念で、もともと幽に通じ、暗ないし黒色を意味する文字だが、老子の場合、天地万物の根元であり、道であり無であり、容易に見定めぬ幽遠なるものである。それは「宗教的『無』」を執筆したときの宗悦の頭に去来した基本的概念の一つであつた。子供の命名は、宗無でも宗空でもよかつたのであろうが、玄の字を選んだのである。】と書いている。柳宗悦ともなると子供の名前を付けるに哲学的なアプローチの基に考へている。

「宗教的『無』」は、大正6年2月に書かれている。これ以降、翌年の3月までの約1年の間、おおむね二カ月に一篇ずつ論文が発表されている。

この年、宗教哲学論の発表を盛んに行つてゐる事を知る。この「宗教的『無』」から民藝理論にどのようなステップで結びついていくのかは、私には難解で理解出来ない面があるが、宗悦は、後年「わたしの念願」（※4）で「我孫子時代の宗教哲学論には、まだ美の問題はほとんど登場せず、白樺時代初期のヨーロッパ近代美術に対する知見が僅かに顔を出す程度である。】と書いている。宗悦は、このように我孫子時代を振り返つてゐる。宗玄も、「手賀沼の畔の思索者」で次のように結んでいる。

【ともかくあの「無」の理論、「無為」、「空」、「否」、「聖賢」の思索がやがて「民」の心に澄む美の感覚を探り出し、その強靱な理論構成に結実し、さらにそれが再び宗教的性格を強めていったことを思えば、手賀沼の畔での思索は、枝を伸ばし拡げた大木の幹に相当するものであつたといえよう。】

柳は、「柳宗悦全集第一巻・我孫子より」でつぎの様に書いている。

【然し我孫子での生活は是等の事のみでない。ここが長い間の仕事場として忘れ難い記憶を吾々に与える。武者は我孫子で短い間に四五冊の本をだしたろう。リーチも恐らく七度程本家を焼いた。志賀は今度の「荒絹」が多分三冊目だろう。自分も三冊の本を出した。思想の暗示やその発展に、自分は、どれだけ此我孫子の自然や生活に負うた事であらう。しずかなもの寂しい沼の景色は、自分の東洋の血に適ひ、東洋の思想を育てるに應はしかつたと自分は思ふ。余の思索に何か静かな一面があるなら、余はそれを主として我孫子の7年間に負うてゐると思ふ。】

宗悦は、我孫子を移転して新しい生活に入り、民藝運動を展開して開花させた。大正6年の宗教哲学論の盛んな発表から始まり、大木の幹にまで育てた地が我孫子であった。

バーナード・リーチ

柳とバーナード・リーチの関係は「私の知れるリーチ」(※5)で次の様に書かれている。

【彼は外国人であるが、私の生涯で最も親しい友となつた。彼も私を想ひ、私もいつも彼のことを想ふ。彼が帰ることはわけても私には淋しい感じがある。彼とは長い間の交友であつた。特にこの2年の間は毎週4日の間、起居を共に、食事を共にし、互いに心を語り、互いに仕事を助け、彼に就いての深い記憶の時を過ごした。私は彼に負う處が甚だ多い。特に彼の敏鋭な芸術的洞察は私の思想に様々な暗示を与えた。】

リーチは、1917年の春、最初の本家を我孫子の宗悦の家の傍らに築いている。リーチは、自身の考案からなる和漢洋を交えた美しく小さな仕事場をその傍らに建てた。再び、「私の知れるリーチ」によると。

【彼は如何に幸福な希望と同時に不安な期待とを以て、最初の一案吾々を、敢えて自ら準備し、自ら焼こうと企てたであらう。彼はこの幸せな冒険を決行した。彼が陶器として独立した最初の一窯、吾々も自ら

の仕事のようにこの日を祝つた。】とある。

最初の窯は温度が上がらず大変苦労したようであるが、何れにしても、リーチの陶工生活は我孫子から出発した。その後、1919年5月26日、リーチ11度目の焼き終わった翌日、焼失することになる。又、エッチングで描いた「沼」に対しては、柳は次のように書いている。(※5)

【私は我孫子で彼が描いた1918年の作「沼」の一枚を、分けても彼の傑作と思う。「沼」は手賀沼であつて私には特に思い出が多い。或秋の夕方日が沈む頃、彼が沼邊でこの景色に眺め入つてスケッチしてゐたのを覚えてゐる。その線や影の味ひに私は彼の心をまともに読む想ひがする。】

この作品は、昭和50年に国賓として来日のエリザベス女王が昭和天皇皇后陛下に会見した時に女王から送られている。併せて、「天目釉抜絵巡礼者文皿」も送られている。

リーチの陶工のスタートは我孫子である。此処を機に陶芸に励み、日本を去つて英国に置いて精進して地位を高めた。リーチは我孫子を著書「東と西を越えて」(※6)で次の様に書いている。

【こうして、おそらく私の生涯で最も幸福だつた年が始まつた。……腕の立つ村の木工が、その窯のすぐ横に窯自体にもトタン屋根のある立派な工房を建てた。小さな円錐形の丘が柳の家と土台柱の上にアトリエを分けていた。柳の妻兼子の歌声がしばしば聞こえた。……それは人生における何とすばらしい時期だつたことか！これは準備の整つた土地に種を播く期間であつた。あの東に何マイルも伸びた夢のような細長い沼は、今も私の臉の裏にくっきりと思ひおこせる。】

青春時代の一コマであつたろうが、4人にとつて我孫子の生活は、彼等のそれからの人生の道標の土台になつたのではないか。この様に考えると、私はこの地が我孫子であつた事を誇りに思つてゐる。彼等は、地元住民とは親しくは交えなかつたけれど、我孫子の地で絆を深め、人生を思索し土台を創りものの見事に夫々の道を追求めて大成している。又、彼等が共通して感

じ得たことがある。それは、我孫子の手賀沼の自然の美しさを体得した事である。そして彼等は、体得した興奮を我孫子の手賀沼の美として「小説」に「自伝」に「手紙」に遺し後世に伝えている。

近年、手賀沼の水質問題はあるが、彼等にとつて手賀沼の美しさ、自然の美しさは今も変わらない。

志賀……雪の積もつた細長い沼船が乗り捨ててある。本当に絵のようだ。東洋の勝れた墨絵が実に此印象を確かに掴み、それを強い効果で現わして居る事を今更に感嘆した。

「雪の日」より抜粋

武者……夕日が雲に反射して、それが手賀沼を金色に染める。あんな静かな、あんな美しさは、彼が2年近く住んでいても見た事がない。

「或る男」より抜粋

柳……ここは地上の美しい場所の一つだと自分はよく思つた。窓越しに吾々は沼を横切つてゆく渡しをいつも見ることが出来る。

「我孫子から」抜粋

リーチ……今考えますとあのころ過ごした手賀沼の日々が、私の人生で最も幸福だつたように思います。このことは以前は申し上げませんでしたけれど、……。

「バーナード・リーチの手紙」より抜粋(※7)

※1「武者小路実篤」新潮日本文学アルバム(1984、以上
4 新潮社

※2作家の自伝7「武者小路実篤」武者小路実篤著

(1994、10)日本図書センター

※3「解説 手賀沼の畔の思索者」柳宗玄著(柳宗悦全集第二巻)筑摩書房(昭和56年3月)

※4「私の念願」の項・柳宗悦著(昭和53年)春秋社発行

※5

※6「東と西を越えて」バーナードリーチ著・福田陸太郎訳(1982,1)日本経済新聞社

※7「バーナードリーチの手紙」我孫子市史研究センター【198】発行「郷土我孫子第二号」

参考「牟礼随筆」武者小路実篤全集第15巻小学館(1990,8)

(特別寄稿)

叔祖父「原田京平」

豊澤 楯彦

原田京平についての研究は、京平の二女のミナミが白樺文学館を訪ねた際に対応したボランティアの平林清江先生や故矢野正男さんが強い関心を持った事から始まり、その後の稲村学芸員が引継ぎ多くの成果が発表され本誌等にも多々掲載されています。

だが、思いもけないことが起こったのである。平成十七(2005)年十一月三日午後の事であった。「原田聚文」の次女で、アメリカ国籍NY在住の洋画家原田南(ミナミ・アストロロゴ)氏が、「自身の誕生の地、我孫子弁天山志賀邸跡を訪れ、さらに旧白樺文学館を訪ねて下さったのである。実に、南氏誕生以来八十年ぶりのことであった。

南氏が旧白樺文学館を訪れたこの日、応対し、その後も連絡を取り続けたのは、当時スタッフの矢野正男氏であった。アメリカに帰国された南氏に、弁天山志賀直哉邸跡・白樺文学館にて撮った写真を送り、国際電話による交信が始まった。実に11回に及ぶ(平成19年6月27日(同年8月)ものとなった。

『我孫子の文化40年の歩み』より

血筋にあたるだけの縁ですがその視点からの拙文に挑みます。

京平は私の祖父の弟になります。従って2代前の人で明治28(1895)年に生まれ大正期から昭和初期に

画家生活を送り昭和11(1936)年に40歳で逝きました。今は直に彼を知った人も語れる人も居なくなりました。

生家は浜松から北に一山超えた静かな山村に建ち、京平の甥にあたる父の没後には住む者も無くなり朽ち果てた姿ですが現存しています。私も父も祖父も京平も同じ屋根の下で生まれました。

生業は農林業の他に和紙の取引もしていて、古い街道に面しています。入り口の三和土から商談用の広間・客間・奥の間と座敷が続く、その廊下の外の庭の池には釣つてきた川魚が泳いでいました。水は裏の清流の上流から小さな専用水路を掘って屋敷に引き込み、生活全ての水源として利用、途中から竈で台所へも。最後は屋敷と川の落差を利用した水車を設けて米を搗き粉を挽き、私の幼少の頃までその水車は動いていました。

この清流を遡ると「かまんど」の滝があり、石清水の落ちる音は静寂な山の中の数少ない存在感でもあります。

その故郷の様子が『歌集 雲の流れ』に幾首か載っています。

※『雲の流れ』京平が病没した後に、妻の睦が発行した

歌集(右下写真はその表紙)

白き穂のなびくを越して向ひ見る

山腹の家に楮打つ音

富士を見にのぼりて来れば日みなみの

山腹の家に紙をほしたり

出身地の阿多古地方は戦前までは阿多古紙の産地でもあり、古くは物納にも指定されていました。山村では平地が少ないため年貢は米だけでは到底足りずありとあらゆる産品で納めていたと記録にもあります。

子のころは山にのぼりて富士の山

見るがたのしく山にのぼりたり

村の西境には観音山(575m)がそびえ遙かに富士山を望められるのを自慢した様子です。里の子供の冒

険にもふさわしい山で、道なき道を上へ上へと一直線に登れば山頂に辿り着き、そこからは東に遠く富士山、南は三方ヶ原台地・浜松・太平洋、西に浜名湖、北には火伏の神の秋葉山から中央アルプヘスと眺望できました。



淋しとて三七日あまりを深夜墓にて火を焚く

父が魂さみしからむと夜の更けを

墓の邊近くかがり火をたく

闇の中に一つ火をたく父が魂

淋しからむと夜毎わがたく

昭和6(1931)年3月に京平の父が亡くなり帰省した際の歌です。村の墓地は村外れの山の中にあり、その共同墓地に土葬していました。三七日つまり21日間墓地でかがり火を焚き続けていた様子です。逝った人への思慕の気持ち溢れ、未だ寒さの残る季節に村人が交代でかがり火を焚き続けてくれる様は、今も共同体として助け合うのが自然と引き継がれています。

この頃の葬儀の様子の一片を垣間知ることができてビックリしました。

村の様子を描いた京平の画は白樺文学館に収蔵されています。穏やかな山里の風景や小川の滝の絵からも京平の故郷への思いがにじみ出ています。

豊かではなくても穏やかで平和な暮らしが今も営まれている自然に囲まれた静かな村です。

大正2(1913)年、そんな山の中から当時は中学現在の高校進学だけでも大事なのに、中途退学してまで画描きを志しての突然の上京なんて!! その時の曾祖父の気持ちと経過を探ろうとしましたが、記録も見つからず探す術も無く分からないままです。

画描きとして逝った京平の追悼集ともなった「雲の流れ」には多くの方々から追悼の言葉が寄せられています。

歌人・国文学者の窪田空穂(くぼた うつほ)、版画家・画家の山本鼎(やまもと かなえ)、洋画家・随筆家の木村莊八(きむら しょうはち)、日本画家の石山太柏(いしやま たいはく)、画家の鬼塚金華(おにつか きんか)、詩人の福士幸次郎(ふくし こうじろう)

これらから交友の広さと人物像を伺うことができました。恥ずかしながら初めて原田京平の存在を知りました。

昨秋から今年にかけて浜松文芸館が「企画展」歌人・画家原田京平 故郷浜松に帰る』を開催しました。白樺文学館の全面協力により成功裏に無事閉じられました。京平に関する広い分野をコンパクトに要領よく分かり易く纏められ、その様は白樺文学館の研究成果の発表会。画家としてもクレパス、日本画、洋画、水彩画、版画と幅広い制作には地元や研究者からも大きな一石となるとの評価でした。

その中で文芸館の鈴木館長が浜松出身の画人「本田庄太郎・原田京平・栗田雄」の3人に先輩・後輩、友人、知人の関係を見出しました。

京平の画への発心の種が見つかるかもしれません。

※ 原田京平についての資料等は全て白樺文学館に寄贈されています。

【覚】

原田京平(はらだ きょうへい)

本籍 静岡県磐田郡上阿多古村西藤平149番地
生 1895(明治28)年10月10日
※除籍謄本では17日生

没 1936(昭和11)年1月16日(享年40歳)

父 原田金徳(1856(安政3)・3・10 ~ 1931

(昭和6)・3・1)

母 志げ(1860(万延1)・9・10 ~ 1933

(昭和8)・7・14)

長男 平一郎

六男 京平

『雲の流れ』1936(昭和11)年5月25日発行に
平文を掲載

歌人・国文学者の窪田空穂(くぼた うつほ

1877 ~ 1967)

版画家・画家の山本鼎(やまもと かなえ

1882 ~ 1946)

洋画家・随筆家の木村莊八(きむら しょうはち

1893 ~ 1958)

日本画家の石山太柏(いしやま たいはく

1893 ~ 1961)

画家の鬼塚金華(おにつか きんか

1897 ~ 1985)

詩人の福士幸次郎(ふくし こうじろう

1889 ~ 1946)

あびこだより102号

「我孫子の地名あれこれ」

荒井 茂男

テレビのクイズなどで出題される「難読(難解)地名」
難読地名とは、日本の地名の中で通常の漢字の読みを
しないことから読むことが難しい地名のことを言いま

す。特徴としては、「知名度の低い文字が使われている」、「文字の読みが一般的な読みと異なる」、「読み方が通常の音訓にない」の3点が該当する地名が難読地名として認識されています。方言や誤読、誤記がそのまま広がり、難読地名として定着してしまった地名もあるようです。日本全国の難読地名について最近の調査(アンケート)では難読地名で有名な「匠瑤市(そうさし・千葉県)」「安栗市(しろうし・兵庫県)」を破り、栄えある一位に輝いたのは長野県東御市(とうみし)。正解率は26.4%でした。

我孫子は古い歴史のある町。市内には難解、奇妙、おもしろい地名(大字おおあざ)・小字(こあざ)が多い。布佐など千年以上も前の地名が、今でも使用されています。

地名は文字伝来(四世紀末)前に存在し、その発音に漢字が当てられました。

七百年代の好字二字令や国郡郷里制から江戸時代、明治・昭和・平成の市町村の合併を経て、現在の地名があります。

地名はそこに住む人たちの日常生活から形成された土地の履歴です。今回の講演では自然地形、信仰耕作などに関わる地名の由来を探ります。

(編集者から)講師
の荒井茂男さんは
我孫子市史研究セ
ンター(市史研)が
平成二十七年に八
年越しで発行した
『我孫子の地名と歴
史ーわが町の字誌
ー』の執筆者の一人
です。



(放談くらぶ)で荒井氏の講演を予定

日時 10月22日(土) 14時 ~ 16時

会場 アビスタ第2学習室

五団体共同企画特別講演会

我孫子市における「多様性ある地域博物館」を考える

市史研究センター 宗岡 恒雄

（講演概要）我孫子は、志賀直哉を始めとした白樺派の文人達が居住していたことから、白樺派ゆかりの地とされている。彼らがこよなく愛した水辺の景観などの自然資産に恵まれた地域である。

また、市内には縄文時代を主に文化財包蔵地が200余カ所ある。東葛地区最大の前方後円墳である『水神山古墳』や『頭椎太刀』、そして『藤原部の設置』等の大和朝廷との親密な関係を窺わせる遺跡・遺物・伝承も多い。さらに1200年前の54棟の倉跡が出土して相馬郡の正倉に比定されている『日秀西遺跡』は学術的にも高い評価を得ている。文化・歴史資産も豊富な地である。

ポテンシャルに恵まれ、都心から40分程度であることから、休日にはバードウォッチング、歴史探訪、サイクリング、ウォーキングやボート等を、三々五々楽しむ人々が見受けられる。

市では2019年4月の文化財保護法の改正を受けて、「我孫子市文化財保存活用地域計画（以下「地域計画」）を作成して、2020年に文化庁長官より認定を受けている。この「地域計画」でも博物館の必要性を記述している。新設の博物館が市民の郷土に対する関心と誇りを高めるとともに、教育や観光にも資するものにとの思いを込めて、永続性のある博物館の在り方を考えてみた。

宗岡氏の講演会は次の通り
日時 10月21日（金）13時～15時
場所 アビスタ第1会議室

（プロジェクト報告）

百人一首を楽しむ会（番外）

今月の歌（恋の歌その16）

美崎 大洋

嘆きつつひとりぬる夜の 明くる間は

いかに久しきものとかは知る

（63）

【現代語訳】

「今夜もまた来てくれないのだろうか？」と悲しい思いを抱いて、それでもあなたを待ち侘びながら朝が来るまで一人で過す。そんな夜がどれほど長いかあなたは知っているのでしょうか？

「入道摂政まかりたりけるに、門をおそくあけければ立ちわづらひぬといひ入れて侍りければ『拾遺集』の詞書がある。

【語句】

【嘆きつつ】夫の訪れがないのを嘆きながら。「つつ」は動作や作用の反復（繰り返）を表す接続助詞。【ひとり寝る夜】寝（ぬ）るは動詞寝（ぬ）の連体形。【明くるまは】夜の明け白むまでの間という意味。【かは】は反語。【知る】は連体形で、「か」の係り結び、「どんなに久しく待ち遠しいものであるか」ご存知でしょうか、ご存知ありますまい」となる。

「開くる間」道綱の母の家の門が開くまでの（…開門が遅いので、来訪者藤原兼家が待ちきれずに帰ってしまった…）所要時間。「明くる間」兼家が来ぬのを嘆きながら寂しく過す道綱の母の一人寝の夜が明けるまでの時間。

平安時代の男女関係は、悲しいほどに男性優位で、「一夫多妻」に「妻問婚」。女性は一夫一妻に家にあつて、自分を妻（の一人）とした男性が、訪ねて来るのをじっと待つ。

兼家が夜遅く彼女の家を訪れたが、そのまま帰ってしまった。門を開けるのに手間取っている様子だったのでと彼は言ってきた。

しかし『蜻蛉日記』では、一子道綱が生まれて間もない天曆9年のころ（作者20歳、兼家27歳）、兼家に一人の愛人ができた。町の小路の女である。兼家の後をつけさせて新しい女ができたことを知った彼女は激怒。それから2、3か月夜明けに門を叩いた兼家を彼女は

拒んで家に入れず、翌朝この歌に「うつろいたる菊」（いるあせた菊）を添えて夫に送った。『拾遺集』の詞書はこのなまなましい事実をばかして虚構化している。

【作者】

右大将（藤原）道綱母（ふじわらのみちつな）のは、承平6年（936年）？～長徳元年5月2日（995年6月）は、平安時代中期の歌人。藤原倫寧（としかず）の娘。『尊卑分脈』に「本朝第一美人三人内也（日本で最も美しい女性三人のうちの一人である）」と書かれているが、尊卑分脈は間違いも多く真偽は不明。藤原兼家の妻の一人となり一子道綱をもうけた。また、兼家の旧妻である源兼忠女の娘を引き取り養女にしている。兼家との結婚生活の様子などを『蜻蛉日記』につづった晩年は摂政になった夫に顧みられることも少なく寂しい生活を送ったと言われているが詳細は不明。『蜻蛉日記』は没年より約20年前、39歳の太夫日を最後に筆が途絶えている。

彼女は才媛の誉れも高く、その評判を聞きつけた兼家に見初められて、二十歳の頃に妻（の一人）になり、一人息子の道綱を生むが、その後、兼家は、前述の新しい女（藤原時姫という名の、いかにもときめきそうなお姫様。彼女は兼家との間に、道隆・道兼・道長・超子・詮子という三男二女を生むことになる）を正室として、道綱母のところにはあまり寄り付かなくなつた。

関連狂歌

酔ひつづれひとりぬるよのあくるまは

ばかに久しきものとかは知る

花火をば貰うて日暮れ待つ子供

いかに久しきものとかは知る

最良なる役者の幕の明くる間は
いかに久しきものとかは知る

牢人のありつくとし見し夢の間は
いかに嬉しきものとかは知る

牢人Ⅱ浪人

今月の歌恋の歌その17)

忘れじの ゆく末までは かたければ
今日を限りの 命ともがな (54)

【現代語訳】

「いつまでも忘れない」という言葉が、遠い将来まで変わらないうのは難しいでしょう。だから、その言葉を聞いた今日を限りに命が尽きてしまえばいいのに。詞書には「中関白(藤原道隆)通ひ初め侍りけるころ」とある。夫であつた時の関白・道隆が夫として作者の家に通ひはじめた頃に歌つた歌という意味で、新婚はやほやの妻が一番幸せな時期に詠まれたものようだ。

【語句】

【忘れじの】「忘れじ」は、「いつまでもあなたを忘れない(あなたへの愛は変わらない)」という男の言葉。「じ」は打消しの意志の助動詞。【難(かた)ければ】「難しいの」という意味。【今日(けふ)を限りの】「今日は、男が「いつまでも忘れない」と言ってくれたその日を指す。「今日を最後に(死ぬ命)」という意味になる。【命ともがな】とは結果を表す格助詞、「もがな」は願望を示す終助詞で、「命であればよいなあ」という意味になる。

【作者】

儀同三司母(ぎどうさんしのはは。生年不詳(996)従二位式部卿高階成忠(たかしななりただ)の娘で、名前を貴子と言い、高内侍(こうないし)とも呼ばれた。中関白藤原道隆の妻となり、儀同三司伊周(これちか)や一条天皇の後・定子を生んだ。(儀同三司は准大臣のことで、三司(太政大臣・左大臣・右大臣)と儀が同じという意味。中関白とは、道隆の父・兼家(かねい)も弟の道兼(みちかね)も関白になったことによる呼び名。)内大臣伊周(974年～1010年)・中納言隆家(979年～1044年)・僧都隆円(980年～1015年)の兄弟及び長女定子を含む三男四女を生じた。夫・道隆が永延3年(989年)に内大臣、永祚2年(990年)5月に関白、次いで摂政となり、10月に定子

が一条天皇の中宮に立てられたため、同年10月26日、従五位上から正三位に昇叙。一方、貴子腹の嫡男伊周も急速に昇進し、正暦3年(992年)十九歳にして権大納言に任ぜられ、翌々年さらに内大臣に昇つたため、貴子は末流貴族の出身ながら関白の嫡妻、かつ中宮の生母として栄達し、高階成忠は従二位と朝臣の姓を賜つた。

ところが、長徳元年(995年)4月10日に夫・道隆が病死すると、息子の伊周と隆家は叔父道長との政争に敗れ、権勢は道長側に移つた。翌年になつて、伊周と隆家は、花山院に矢を射掛けた罪(長徳の変・息子の伊周が恋した女性の家に夜な夜な通う男を不審に思い、兄弟で待ち伏せして矢を射たところ、それは先の天皇・花山院だつた。花山院は女性の妹のもとに通つていた)によって大宰権帥・出雲権守にそれぞれ左降・配流。貴子は出立の車に取り付いて同行を願つたが、許されなかった。その後まもなく病を得て、息子の身の上を念じながら、同年10月末に薨去した。四十代であつたと推定される。

関連狂歌

よみ歌のうへならば そいふだあろ
けふを限りの命なれとは

言葉の上だけで、本気ではあるまいと見くびっている。
「いふだあろ」は非常にくだけた口語。

忘りやるな行く末まではかたけれど
命かぎりに金をかぎりに

行く末の不安けすすべ他にあらば
今日を限りの深酒ともがな

蒲焼になるてふ筈(ざる)の鰻さへ
今日を限りの命ともがな

参考文献『グラフィック百人一首』世界文化社

「ちよつと差のつく百人一首」SNS版

『爆笑!ハロディ百人一首』京都新聞出版センター

楚人冠の思想と性格形成について

現在、杉村楚人冠記念館では夏季企画展、杉村楚人冠生誕一五〇年記念として「杉村楚人冠の青少年時代」のタイトルで展示を行っている。(10月2日まで)「日記や英語、宗教等、様々な物事への関心、また、親友・古川勇や恩師イーストレーキらとの交流から、杉村幸太郎はジャーナリスト・杉村楚人冠となつたのです」これまでなかなか焦点が当てられてこなかった杉村楚人冠の青少年時代が、後の楚人冠にどれほど大きな影響を与えていたのか、少しでも関心を持つていただけたのなら幸いです(企画展示目録より)

改めて杉村廣太郎の生い立ちを眺めてみる。

明治5年7月25日、和歌山県和歌山市にて出生。父は和歌山藩士の杉村庄太郎。3歳の時に父と死別し、以来、母の手で育てられる。小学校時代はいじめられっ子で、いじめられると家にとじこもるような臆病な少年だつたが、成績は良く、ほとんどの学科で主席の座を占めた。13、14歳ころまで泣き虫で引つ込み思案であつた廣太郎は、今度はその反動で「元來が母より外に怖いものも、やさしいものもないと心得ている自分としては昔受けた迫害の反動とでも言おうか、いつしか意地っ張りの強情な、手も足もつけられない腕白者となつてしまつた」と述懐している。

楚人冠が自ら記すところによると、子供のころから新聞が好きで、一生の望みは新聞記者になることであつた。中学時代、中学生としてあまり読まないような文学雑誌や小説を愛読していた。全体の学科からいえばその成績は上位の中ほどであつたが、作文はさすがに上手で何でも(甲、乙、丙)の甲だつた。そして彼の文章は常に新しかった。ひとの意表に出るところがあり長つたらしい演説が流行しているときでも、廣太郎だけは急所をつかんだ短文を書いたり短い簡明な演説をして超然としていた。

企画展示では青年時代の思想形成に影響のあつた人物として古河勇、イーストレーキの名前があつたが、成人となつた楚人冠の性格として見てとれるのは

- ①偽善を嫌う(開き直り、一種のダンディズム)
- ②気難し屋③皮肉屋

さらに楚人冠本人の弁では「自身の病弱の憂十個」として以下の性格を挙げている。

1 臆病、2 弱気、3 無精、4 根気がない、5 気が短かい、6 几帳面過ぎる、7 ケチン坊、8 人に師事することを知らない、9 無愛想、10 人づき合いが悪い

本人の弁(自虐を含め)なので若干割り引いたとしても楚人冠の著作などからはこれらの性格を説明できる。こんなエピソードがある。

〔その1〕楚人冠を理想像として朝日新聞を受け首尾よく入社できたのでお礼と今後何分よろしくというために我孫子まで出かけた新入社員、楚人冠は丁度出かけようとして玄関を出たところだった。駅まで歩きながら話そうということになった。見ると楚人冠は重たそうなカバンをぶらさげている。記者は気を利かすべく「先生カバンをお持ちしましょう」と受け取るようにしたところ「ちよとと待て、言つとくがね、人のカバンを持つとうなどという了見は一生起さんほうがいいよと言った。

〔その2〕新聞社である部長と擦れ違った。その部長は愛想たつぷりでニコニコしながら楚人冠に挨拶した。いきなり「何がおかしい」と浴びせて相手を面食らわせた。ニタニタしたり、エヘエヘラするのには我慢がならなかつたらしい。お追従笑いに至つてはさらに嫌いで。家族にも「おかしくもない時に何を笑う」とよくたしなめられたらしい。

楚人冠の思想・性格形成の原初的な理由を楚人冠の四男の武氏は次のように書いている。「幼時から母ひとりと子ひとりの境遇で、親戚はじめ周囲から受けた迫害、脅威に対する母子一体となった反撥、抵抗というものがある」。楚人冠の終始変わるものなかつた母親に対する孝心の深さはこのことで説明できるといふ。

楚人冠は出版する本の巻頭言、序などの前に次のような言葉をその都度掲載し母親に対する思いを率直に表した。

「二十三歳の寡婦と三歳の孤児とが、其の夫と父との死に慟哭せる時に乗じて、我が杉村一家を覆せんと謀れる、わが族父何某の亡霊に此の書をささぐ、」

『七花八裂』昭和四十一年一月発行

「年二十三にして、其の夫を失ひ、才貌の雙美を以てして、屢々再醮(再婚の意・筆者注)を勧めらるゝも應ぜず、心細き親一人子一人の境界に伴ふ一切の苦楚を嘗めて、而かも嘗て一たびも其の持する所を改めず、斯くて當時取りて僅に三つになれる著者を愛育して、寡居此に三十三年に及べる わが最愛の母上に此のはかなき小冊子をささげ奉る」

〔大英游記明治40年〕

「家に在りては其の親に、嫁ぎては其の夫に、夫死しては其の子に、子長じて後は其の孫に、そが渾身の愛をそそぎて片時の安きを愉み玉はざる わが最愛の母上に 再び此のはかなき小冊子をささぐ、」

〔半球周遊明治41年〕

「四年ごし病床に臥して何一つ小言をいはれぬ 母様にこの書をささぐ、」

〔續湖畔吟昭和7年〕

「七年ごし病に臥せる母様に この書をささぐ、」

〔續々湖畔吟昭和10年〕

『楚人冠全集』第一巻完成、真つ先に母に贈呈(昭和12年1月)

参考文献 『楚人冠全集』『酒中花』(杉村武)

(美崎)

第一小児童会が嘉納治五郎先生之像 清掃

我孫子市の第一小学校で昨年度より児童会を中心に行つてきた「嘉納治五郎先生之像」清掃活動が今年度もスタートし、7月5日、児童会のメンバーと4年生の学級委員たちが参加した。

「子ども達は代表の意識をもつて暑さに負けず一生懸命に取り組みました。嘉納先生の像がきれいになってとてもスッキリして楽しかったと感想を発表していました。我孫子の魅力発信とふるさとあびこを愛し貢献できる一小小子の育成を目指して今年度も活動を地道に続けていきます。応援よろしく願います」

(第一小ホームページより)

税務署からの【未払い税金のお知らせ】

e-Tax をご利用いただきありがとうございます。
あなたの所得税(または延滞金(法律により計算した客助)について、これまで自主的に納付されるよう催促してきましたが、まだ納付されていません。
もし最終期限までに 納付がないときは、税法のきめるところにより、不動産、自動車などの登記登録財産や給料、売掛金などの債権などの差押処分に着手致します。
納税確認番号:****2869
滞納金合計:50000 円
納付期限: 2022/8/29
最終期限: 2022/8/29 (支払期日の延長不可)
お支払いへ⇒ <https://www.nta.go.jp/tax-payment>
※ 本メールは、「国税電子申告・納税システム(e-Tax)」にメールアドレスを登録いただいた方へ配信しております。
なお、本メールアドレスは送信専用のため、返信を受け付けておりません。ご了承ください。

発行元: 国税庁

Copyright (C) NATIONAL TAX AGENCY ALL Rights Reserved.

国税局・税務署をかたつた不審なメールにご注意ください
(左記のようなメールが届きますが、指定されたURLをクリックしないでください)



第三十六回短歌の会（最終採択の一首）

七月十九日実施

二十歳の日我に哲学の書をくれし父は
ひそかに落語聞きおり

村上 智雅子

出てこない言葉を手繰るもやもやを
米とぐ水とともに流せり

納見 美恵子

石垣に寄り添い待つ君ゆふぐれの
白きブラウス白きくつした

佐々木 侑

禅寺に置かれし栞^{ひもと}繙けば
「平常心是道」とあり

飯高 美和子

娘来て取って置きだと言ひ訳し
冷やしたグラスに冷酒呑む夕

芦崎 敬己

聴衆も演者も望んだ生の声
マスク外せず無念の定演

美崎 大洋

きらめきし我が青春のつかの間を
契^{ちぎ}りし人のすでに亡きとふ

伊奈野 道子

人の影延び来し夕べの坂の道
夕焼け小焼時の鐘告ぐ

大島 光子

手賀沼流域フォーラム イベント

川めぐりと木下の史跡散歩（当会企画）

日時 10月7日（金） 13時～16時（雨天中止）

集合場所 印西中央公民館（木下駅下車徒歩10分）

内容 ①中央公民館内で外来植物などの環境講話

②手賀沼川流域「六軒川」、「弁天川」を遊覧船

2艘で見学・周遊

③印西の排水機場見学・木下の史跡探訪

定員・費用 定員20名、無料

申込方法 ハガキに氏名（1枚に2名まで可）、住所

年齢、電話

申込先 佐藤やす子（我孫子市天王台3-32-16）
締め切り 9月23日（申し込み者多数の場合は抽選）

手賀沼流域フォーラムは、手賀沼の水質の改善や流域の環境保全を進めるため、市民活動団体、流域7市柏、我孫子、印西、白井、鎌ヶ谷、松戸、流山、手賀沼水環境保全協議会が協働し、山階鳥類研究所の後援で開催している。当会が所属している美手連が行政と手賀沼流域フォーラムを協働開催している。

当会の行事予定

□「放談くらぶ」

日時 10月22日（土）14時～16時

会場 アビスタ第2学習室

講師 荒井 茂男氏（市史研究センター）

演題 「我孫子の地名あれこれ」

参加費、会員無料、非会員三〇〇円

申し込みTEL七二八五〇六七五 佐々木まで

（8ページ「あびこだより」参照ください）

□五団体共同企画特別講演会

日時 10月21日（金）13時～15時

場所 アビスタ第1学習室

講師 宗岡 恒雄氏（市史研究センター）

演題 「我孫子市における「多様性ある地域博物館」を考える」

（9ページの講演概要参照ください）

□市民のチカラまつり参加

講演会の開催日未定

前回会報で11月5日開催と掲載しましたが会場確保の都合で開催日は未定です。決定次第連絡します。

プロジェクト「短歌の会」

第三十七回短歌の会

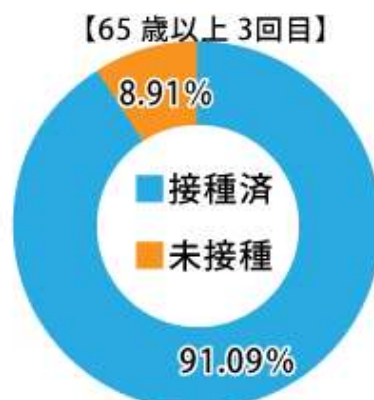
日時 9月27日（火）13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

我孫子市 新型コロナワクチン3回目接種状況

（令和4年9月7日時点の速報値）

年齢	対象者数	接種者数	率（%）
5歳以上	128,097	89,976	86.29
65歳以上	41,814	38,089	91.09
5～64歳	86,283	51,887	60.14



編集後記 著作権とは、著作物を創作したことにより著作者に発生する権利のことをいい、著作権法で保護されています。一般の本は勿論、パンフレットなどの文章を無断で引用することは許されません。イラストや画像、写真なども同様です。文章や写真などを引用した際には著作権者に対して「許諾を得る」か、その出典元を明示しなくてはなりません。今まで当会報でも著作権侵害にあたる事例がいくつかあったと思いますが、それらは全て編集責任者の責任です。SNSで会報が多くの特定多数の目に触れるようになった現在、著作権についてより厳格な管理をしなければと思います。（美崎）

◎稲村雑談寄稿「我孫子の文化を守る会」は休載しました。